

Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2014

Report

2014

巻頭言

文明研究所に思う



杏澤 宣賢

文明研究所所長
総合教育センター教授

今年度から東海大学の附置研究機関である文明研究所の所長をつとめることとなった。そこでこの文明研究所がどのような経緯をへて設立されたのか、その原点を探るとともに、今後の研究所のあり方について考えてみたいと思う。『文明』第1号（東海大学 1962年）や『東海大学50年史 部局篇』（学校法人東海大学 1991年）よれば、文明研究所は次の様な経緯をへて設立されたことが記されている。初代の所長をつとめた原田敏明の『文明』創刊号には「そもそも当文明研究所は、東京における本学文学部の再出発に際し、新興の大学として特色ある文学部をつくろうという構想の中から生まれた。当初既成の大学の学科編成にとらわれることなく、新しい学問的理想をもった文明学部として準備されたのであったが、学内外の事情はこれを時期尚早であるとし文明研究所として発足させたのである。」とある。これをみると、本学の創立者松前重義博士は文明学部開設の構想を持っていたが、これが実現できなかったことからとりあえず文明研究所を設立し、将来の学部開設を目指していたことが伺われる。さらに、研究所規則第2条には「研究所は人類文明という包括的事実を、人文、社会、自然諸科学の協力によって探究し、文明学という新しい学問的理想を完成発展させることを目的とする」（『文明』第1号所収）と記されている。遠大な構想のもとに創られた研究所であるということが分かる。また、「研究所日記」（昭和34年—35年）には、所員として「尚樹啓太郎、辻 哲夫、里見元一郎」等の名前がみえている。所長の原田敏明は民俗学研究、尚樹啓太郎はビザンツ史研究、辻哲夫は科学（物理学）史研究、里見元一郎はオランダの歴史家ホイジンガーの研究とそれぞれ日本におけるその分野の第一人者であり、そうそうたる研究者が所員となっていたことが分かる。この他、研究所では毎月の研究員によ

る研究発表に加えて輪読会も行なわれ、テキストとして『Science and the modern world』（A.N.Whitehead）が使用されていたことが記されている。また、シンポジウム「現代について」が行われ、その内容も『文明』に掲載されている。

この創刊号をみただけでも、当時の所長をはじめ所員達の意気込みと熱気を感じることができる。こうして発足した文明研究所は今年で55周年を迎えることになった。今年度はこれまで行ってきた研究を新たな所員・研究員とともに第二期の研究として継続するとともに、新しいテーマとして「文明遺産をめぐる課題」を掲げている。これは、文明研究所が所有するアンデスの遺物を用いた研究を活性化しようとする試みでもある。これまで文明研究所が行ってきた研究の伝統を継承しながら、21世紀迎え新たな文明研究の課題となった平和、エネルギー、民族問題等こうした問題についても積極的に取り組んでいく必要があろう。個人的なことになるが、初代所長の原田敏明は著者が学部・大学院で御指導いただいた恩師であり、所員の尚樹啓太郎は『東海大学50年史』編纂の際委員長として御指導いただいた方である。こうした先人達によって築き上げられた文明研究所は、東海大学における文系の研究所として唯一のものであり、その果たすべき役割は極めて大きいと考えている。これまで築いてきた伝統を引き継ぎ、新たな課題に盛んに挑戦していくそうした姿勢をもって所員、研究員とともに今後活動していきたいと考えている。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創立者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。当研究所は、これまで「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、3年を1期とする研究プロジェクトを策定して研究を推進してきました。第1期「現代文明の展開と社会文化的多様性」（2001年度—2004年度）においては現代文明の多様性を指摘し、第2期「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」（2005年度—2007年度）においては地域研究と国際的な研究連携を進めながら、グローバリゼーションの持つ意味を人間の生活の変化という観点から捉え研究を行いました。第3期「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」（2008年度—2010年度）においては対話と共生の観点から21世紀文明のあり方に対する提言を目指し、第4期「創出すべき21世紀文明」（2011年度—2013年度）においては第3期から打ち出した「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」をさらに進めてきました。

2014年度当研究所では、本学の第Ⅱ期中期目標（2014年度—2018年度）を受けて「文明とグローバリゼーション」というテーマを掲げました。そして、研究分野（国際レベルでの研究拠点の確立）、社会連携（地（知）の拠点の確立）、国際連携（グローバルユニバーシティの構築）のミッションを担当します。この中の研究分野では、2013年度から継続コアプロジェクトとして「アイデンティティの多様性と共生」、「グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築」、「震災復興と文明」を推進すると共に、新たに「文明遺産をめぐる課題」を加えた4つのプロジェクトを実施していきます。

文系研究所の沿革

- 1959年 文明研究所設立（初代所長 原田敏明）
- 1964年 基礎社会科学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1969年 芸術研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1982年 法学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1988年 基礎社会科学研究所、法学研究所を統合して社会科学研究所設立（初代所長 白鳥 令）
- 2001年 文明研究所、社会科学研究所、芸術研究所を統合して新文明研究所設立（初代所長 松本亮三）

2014年度の研究プロジェクト

「アイデンティティの多様性と共生（第2期）」 （コア・プロプロジェクト1）

小貫大輔・沓澤宣賢・平野葉一・松本佳穂子

そもそも文明にとっての多様性とは何を意味するのか、アイデンティティというキーワードを使って研究しようという二年計画の今年が初年度です。まずは「言語的多様性」と「ジェンダーを巡る多様性」および「異文化間の出会い」の3つのテーマについて研究し、それらのテーマをケーススタディとして総論的文明論を試みようとしています。「言語的多

様性」を巡っては、多様性に前向きに取り組むヨーロッパの打ち出す指標を基に異文化間能力の構成要素について研究しています。「ジェンダー」については、ダイナミックに変化するブラジル社会にフォーカスをあて、トランスセクシュアルを含む多様な「ジェンダー・アイデンティティ」や、異性愛から同性愛へと多方向・多様に連続・断続する「性的指向」まで、多様なジェンダーのあり方への寛容の現状について研究しています。「異文化間の出会い」に関しては、歴史研究の視点からシーボルトの人生と彼の異文化理解の様が示唆するものについてオランダのライデン国立民族博物館所蔵資料等を参考にしながら検討しています。

グローバル化下での社会システムの変容と再構築 (第2期) (コア・プロジェクト2)

平木隆之・大江一平・大久保彩子・富士原雅弘

本研究は現代文明をグローバル化という視点からとらえ直すことを主たる目的としています。現代文明をグローバル化の視点から再認識するという事は、グローバル化が現代文明に対しどのような歴史観をもつよう迫っているのかについて考察することといえます。そこで、本研究はグローバル化が社会を変容させる推進力となりうる歴史観とは何かを検討する一方で、グローバル化に対する拮抗力となりうる歴史観についても検討してきました。そして、この推進力と拮抗力を一体的にとらえることにより、グローバル化が社会を変容させる経路の多様性を考察しました。本研究の学術的意義は、政治、経済、環境、教育といった多様な分野の研究者が当該プロジェクトに関わることにより、多様な歴史観に基づいて、分野横断的な視点からグローバル化を考察する点にあるといえます。また、本研究の現時点における成果は、グローバル化という現代的課題に対し、「調和のとれた文明社会の構築」という東海大学の建学の精神に立ち返り、現代文明論を必修科目として開講する大学としての独自の視点を発信できたことにあります。

「震災復興と文明(第2期)」(コアプロジェクト3)

田中彰吾・沓澤宣賢・馬場弘臣・杉山太宏

東日本大震災はきわめて大規模な自然災害であり、被災地域の復旧・復興という具体的な課題を残すだけでなく、原子力発電の問題を含め、私たちに現代文明のあり方を反省させる契機となりました。

人間、社会、自然、技術の調和が取れた文明社会を創造することは、東海大学の建学の理念です。当研究所では、2011年以来、東日本大震災からの復興過程が問いかけているさまざまな文明論的課題を明らかにし、望ましい復興政策について検討する研究プロジェクトを継続してきました。過

去のプロジェクトでは、大津波災害への多重防御策、再生可能エネルギーの活用方法、水産業と漁村の復興支援策等が検討されました。

2014年度は、参加メンバーが変更されたことを受け、人間学的観点、歴史学的観点、工学的観点から、新たな課題設定のもとで震災復興と文明についての検討を続けています。2年計画の1年目である今年度は、「復興におけるランドスケープの形成」「江戸期の大地震と東日本大震災の史的比較」「防災・減災のためのハード対策とソフト対策」という個別の特色ある課題を設定し、本格的な調査を開始しました。今年度と来年度の『文明』誌上で成果を発信していきます。

「文明遺産をめぐる課題」(コア・プロジェクト4)

横山玲子・山花京子・吉田晃章

本プロジェクトでは、1) 東海大学所蔵の考古学遺物(古代エジプト及び古代アンデス)を利用した企画展示及び遺物整理、2) 文明理論研究の2つの課題である。2014年度は主に、1)のうち、古代エジプト文明の考古学遺物「鈴木コレクション」を用いた企画展示の開催を中心に活動を行った。本展示企画は横浜ユーラシア文化館との共同企画展示であり、2015年1月31日～4月5日にかけて、横浜ユーラシア文化館において「古代エジプト ファラオと民の歴史 東海大学のエジプトコレクション」として開催されている。山花京子氏(プロジェクト分担者)を中心に、展示の企画・準備、図録の作成を行うと共に、東海大学学生ボランティアの指導によるパピルス修復体験も企画された。一方2)の文明理論研究においては、横山玲子(プロジェクトリーダー)が主に学会活動を中心に、現代文明の本質的な問題がどこにあるのかという理論的な研究活動を行った。特に、2014年11月に代々木キャンパスで開催した地球システム・倫理学会第10回学術大会の実行委員長を務め、一般社会人及び研究者(計14名)による個別研究発表、黒柳徹子氏(女優・ユニセフ親善大使)による特別講演「私が会った世界の子どもたち」及び、「いのち～生成と循環」と題した公開シンポ

ジウムを開催した。公開シンポジウムでは、岩澤知子氏（麗澤大学准教授）、島蘭進氏（上智大学教授）、田中克氏（京都大学名誉教授、舞根森里海研究所）、松本亮三氏（東海大学教授）をパネリストとして迎え、服部英二氏（地球システム・倫理学会会長）をコメンテータとして、日本思想、環境論、ひいては生態系へと、文系理系を問わず幅広い視野から現代文明の問題と文明の未来についてフロアとともに活発な意見交換が行われた。

『文明』第19号(2015年3月発刊) 内容のご紹介

巻頭言

- ・シーボルトのまなざしと彼が蒐集したもの
(沓澤宣賢)

講演会

- ・A I D S当事者運動の力が社会をかえる！
～ブラジルの当事者運動～
(ジョセ・アラウージョ・フィーリョ)
- ・英語言語のグローバリゼーション
(アンドリュー・ウォルパート)

論文

- ・Why should linguistic and cultural diversity be important? –An aspects for learning the significance of biocultural diversit
(鷹取勇希・平野葉一)
- ・元禄大地震と宝永富士山噴火その1
–相模国小田原藩の年貢データから–
(馬場弘臣)

研究ノート

- ・グローバル人材に必要な能力とは？
–企業の「英語化」制作をめぐる–
(松本佳穂子)
- ・サブ・サハラ諸国の国際平和活動への人的資源の提供に関する考察
(田辺 亮)

調査報告

- ・重慶市の大気汚染と日中対話
(関根嘉香・太田栞)

講演会

文明研究所第31回講演会（2015年1月23日） 「セクシュアリティとシティズンシップ」 ダレン・ラングドリッジ先生

ゲイ男性は父親になることができるか？

これが、本講演の核になる問いであった。ラングドリッジ氏は、イギリス、オープン大学で心理学科長を務めつつ、心理臨床家として性的マイノリティの心理的支援にかかわっている。彼の問いは、生物学的な次元や心理学的な次元ではなく、社会的な権利の問題として、ゲイ男性に子どもを持つ権利が認められるべきか否かをめぐるものだった。彼自身は心理学者なのだが、セクシュアリティについて専門的に扱ううちに、社会における性的マイノリティの権利の問題について深く考察するようになったそうである。

この問いが学術的な問いとして意味を持つには、相応の社会的な（あるいは文明論的な）背景がある。近代社会は長らく、「異性愛・結婚・生殖」というあり方を正当とするイデオロギーに依拠してきた。ここからすると、同性愛や両性愛、同性同士の結婚、同性カップルによる養子縁組などは、すべて正当な家族のあり方に対する逸脱や侵犯として扱われることになる。

家庭や家族を私的領域とみなすべきではない。ラングドリッジ氏は、フェミニズムの貢献にも触れながら、性愛という親密性の実践が、市民社会の公共的な側面と連続していることを強調する（だからこそ「セクシュアリティとシティズンシップ」が講演タイトルになっていたのである）。そして、クィア理論（異性愛以外の多様な実践を擁護する理論）に

言及しつつ、伝統的な家族概念を多様な方向に拡張することが現代社会の課題であると主張する。

このような観点から問題を設定するなら、ゲイ男性が父親になることは、さまざまに分岐する問題群の一例に過ぎないとも言える。しかし、各種の論点が集約して現われる重要な案件でもある。古典的な家族観を大切にする人々からすると、子ども以前に同性婚それ自体を認めがたいと考えるかもしれない。また、同性同士では生物学的に子どもはできないはずだから、父親になるべきではないと主張する人もいるであろう。

他方、同性愛者でも子どもを欲しがるとは限らない。たとえば、同性愛者の中にも世代差があって、市民権を主張し始めた第一世代は、子どもを持たないことにゲイとしてのアイデンティティを見出す傾向が強かったと言われている。また、親になる権利を国家によって付与されることで、同性愛者という性的マイノリティが、異性愛にもとづく家族関係を実践するマジョリティへと同化されていくのではないかと、と危惧する声もある。いわば「幸せなゲイ家庭」は、保守的なゲイから見ると、ゲイらしさを失っているように見えるのである。

ラングドリッジ氏は、養子、里親、代理出産などを通じてゲイ男性が父親になるケースが増えつつある現実や、ゲイ家庭でも子どもは一般的な家庭と大差なく成長するという心理学的な調査データを踏まえながら、ゲイの親権を認める方向へ現代社会が一步を踏み出すべきだという考えを示された。排除でも同化でもなく、ゲイ家族をゲイ家族のまま包括することは、市民社会の地平を押し広げる新たな一步である。解釈学者ポール・リクール「イデオロギーとユートピア」の議論に依拠して、この局面を弁証法的に理解するという点に、彼の理論的見解の独創性があった。

当日、さまざまな議論があったことは言うまでもない。詳細は紙面の関係で割愛するが、講演会場でも終了後の情報交換会場でも、多くの参加者が彼を囲んで活発に議論を交わしていたのが印象的だった。学術的な水準の高さにおいても、議論の射程の大きさにおいても、文明研究所にふさわしい講演会であった。

（田中彰吾）



展示会

「古代エジプト ファラオと民の歴史」

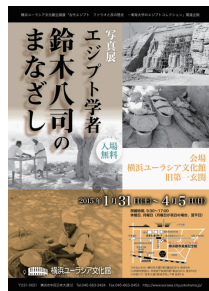
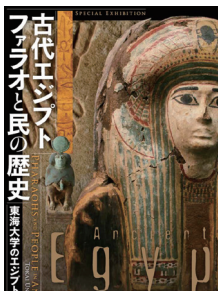
東海大学のエジプトコレクション

2015年1月31日～4月5日（横浜ユーラシア文化館）

東海大学文学部は2010年に寄贈を受けた古代エジプト及び中近東コレクション（鈴木コレクション）を所蔵、管理している。考古資料の数は約5,000点、写真資料は約15,000点あり、これらはすべて現代の我々が未来へ伝えていくべき人類の文化遺産である。現在、学内でボランティア学生とともに保存・修復作業やデジタル・アーカイブ化を進めており、これらの資料が研究活動や教育啓蒙活動に役立つための基盤づくりを行っている。

学内でのこのような活動成果を目に見える形で一般社会に示し、「開かれた大学」そして「地域の知の拠点」としての役割を果たすために文明研究所と総合研究機構の支援を受け、2014年度末（2015年1月31日～4月5日）に東海大学と横浜ユーラシア文化館共催で「ファラオと民の歴史－東海大学のエジプトコレクション－」展覧会を開催する。本展覧会は文化財に取り組む本学の姿勢を公にする絶好の機会である。本学が所蔵する文化財が本学の教員や学生によってどのように活用されているのか、総合大学のスケールメリットを活かして行われている文理融合の研究とはどんなものか、また、地域の人々へはどのように「知の還元」が行われているのか、このようなテーマについての紹介が開催館全フロアで行われる。

さらに、展覧会にあわせて編纂された書籍『悠久なるナイル－ファラオと民の歴史－』には古代エジプト資料の解説や歴史説明だけでなく、本学が古代エジプトを中心に行っている研究の成果報告を盛り込んだ項目も加えている。（山花京子）



研究会

・文明研究所第1回研究会(2014年5月26日)

「ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係古写真について」(コアプロジェクト1)

所長 沓澤宣賢 総合教育センター教授

・文明研究所第2回研究会(2014年8月2日)

「ヘゲモニー論からみた英語文化支配の構造」

鷹取勇希 外国語教育センター非常勤講師

所員 平野葉一 文学部ヨーロッパ文明学科教授

・文明研究所第3回研究会(2014年10月22日)

「定住外国人の地域への政治参加はどこまで可能か？
－定住外国人施策・参政権・国籍をめぐる問題について－」(コアプロジェクト2)

所員 大江一平 総合教育センター准教授

・文明研究所第4回研究会(2014年12月3日)

「元禄大地震と宝永富士山噴火－小田原藩の年貢データから－」(コアプロジェクト3)

研究員 馬場弘臣 教育研究所教授

所員の活動

大江一平

文明研究所所員・総合教育センター 准教授



【執筆・翻訳】

- 孝忠延夫・大久保卓治編著・大江一平・小林直三・辻雄一郎・奈須祐治・守谷賢輔著『実感憲法！ゼミナール』（共著）（本人担当分：第2、15、16、17章）法律文化社 2014年5月
- 「著書紹介 アメリカ合衆国の不文憲法 AKHIL REED AMAR, AMERICA'S UNWRITTEN CONSTITUTION: THE PRECEDENT AND PRINCIPLE WE LIVE BY」『アメリカ法』2014-1 79-84頁（2014年11月）
- 大江一平「定住外国人の地域への政治参加はどこまで可能か？—定住外国人施策・参政権・国籍についての憲法学的考察—」小林直三・根岸忠・薄井信行編著『地域に関する法的研究』（新日本法規出版）145-170頁 2015年3月公刊予定

【報告・講演】

- 「定住外国人の地域への政治参加はどこまで可能か？—定住外国人施策・参政権・国籍をめぐる問題について—」2014年度文明研究所第3回研究会（2014年10月22日）

小貫大輔

文明研究所所員・教養学部国際学科 主任教授



【執筆・翻訳】

- 「多文化子どもプロジェクト北海道研修キャンプ報告」『東海大学教養学部紀要』2015年3月（予定）

【報告・講演】

- Daisuke Onuki&Lilian Terumi Hatano(共同発表), "Immigrant Children from South America and Brazilian Schools in Japan", Celebrating Linguistic Diversity Conference 2014 (University of Toronto, Canada) 2014年4月
- 小貫大輔・ハタノ、リリアンテルミ・ミゾグチ、シゲヨ(共同発表)「ブラジル学校高校生のポルトガル語力と日本語力—作文力調査を踏まえて」、母語・継承語・バイリンガル教育研究会2014年度研究大会（国際基督教大学） 2014年8月
- 小貫大輔(単独発表)「ブラジルの人口・開発問題—カイロ後の20年間を振り返って」、日本人口学会第66回大会（明治大学） 2014年6月
- Daisuke Onuki(単独発表) "The Humanization of Childbirth Movement in Brazil" (poster presentation), 13th Asia-Oceania Association of Sexology Congress (Brisbane, Australia), 2014年10月
- 小貫大輔(招待講演)「触れ合いの科学を实践する—愛と信頼のホルモン『オキシトシン』について」、第43回新潟県学校保健学会、2014年12月

【その他の活動】

- 「マルチカルチャー・キャンプ」開催（東海大学、2014年8月）

沓澤 宣賢

文明研究所所長・付属図書館長・総合教育センター 教授



【執筆・翻訳】

- 「シーボルトの知的財産を現代に生かす」、「日本語訳・現代語訳 外務省外交史料館所蔵「故シーボルト男一族略伝」(石山禎一著編『シーボルトの生涯をめぐる人びと』(長崎文献社 2013年11月)
- 「日露和親条約をめぐる一考察—シーボルトの関わりを中心に—」(『社会環境論究』第6号 2014年1月)
- 「シーボルト研究の現在—アレクサンダーとハインリッヒに関する研究もふまえて—」(『洋学』第21号 2014年7月)

【報告・講演】

- 「シーボルト研究の現在」(洋学史学会2013年度大会講演 2013年7月)
- 「シーボルトと日本」(福岡東海キャンパス講座「学びの駅TOKAI」(2014年12月)

田中 彰吾

文明研究所所員・総合教育センター 准教授



【執筆・翻訳】

- The notion of embodied knowledge and its range. ENCYCLOPAIDEIA: Journal of Phenomenology and Education, Num. 37, pp. 47-66, 2014年4月
- 「私の研究：他者理解の身体性」, 日本体育学会・体育哲学専門領域会報, Vol.18(3), pp.5-6, 2014年11月
- Shogo Tanaka. Creation between two minded-bodies: Intercorporeality and social cognition. Akademisk Kvarter (Academic Quarter), Vol. 9, PP.265-276, 2014年12月
- Shogo Tanaka. Social understanding as a creation: Intercorporeality and aida, 東海大学総合教育センター紀要, 第35号, ページ未定, 近刊

【報告・講演】

- 「現象学と心の科学—他者理解の問題を中心に」第72回心の科学の基礎論研究会にて一般発表(明治大学), 2014年7月19日
- "Social understanding as a creation: Intercorporeality and aida", 39th Annual Conference of the International Merleau-Ponty Circleにて般発表, ジュネーヴ(スイス) 2014年8月30日
- "Phenomenological reconsideration of the Theory of Mind" (心の理論についての現象学的再考察), 日本心理学会第78回大会にてシンポジウム発表(同志社大学), 2014年9月12日
- 「身体性から考える自己と他者」第8回臨床精神科リハビリテーション研究会にて招待講演(神戸学院大学), 2014年11月29日

【その他の活動】

- (企画・司会) 日本心理学会, 第78回大会, 公募シンポジウム「社会的認知と現象学」(話題提供: 田中彰吾, 植田嘉好子, ダレン・ラングドリッジ, 指定討論: 渡辺恒夫), 同志社大学, 2014年9月12日

平木隆之

文明研究所所員・海洋学部環境社会学科 教授



【執筆・翻訳】

- 「企業の社会的責任と市場共創」 『環境経済・政策研究』 Vol.7, No.2, 2014年9月, 87-90.

【報告・講演】

- JICA課題別研修「地域開発計画管理コース」にて「地域開発アプローチの比較」（英語）講義担当

平野葉一

文明研究所所員・文学部ヨーロッパ文明学科 教授



【執筆・翻訳】

- 「Why should linguistic and cultural diversity be important?- An aspects for learning the significance of biocultural diversity」 鷹取勇希・平野葉一 共著 文明研究所『文明』19号 2014年3月刊行

【報告・講演】

- 「ヘゲモニー論からみた英語文化支配の構造」 鷹取勇希・平野葉一 共同発表 文明研究所研究会・2014年度国際学術セミナーと共催 2014年8月2日

【その他の活動】

- 平塚子ども大学「秦アカデミー」（平塚市・東海大学共催）2014年11月16日
- 伊勢原市立図書館市民のための教養講座「続・レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿を見る」（伊勢原市立図書館・東海大学図書館共催）2014年10月11日

横山玲子

文明研究所所員・文学部アメリカ文明学科主任教授



【執筆・翻訳】

- 「マヤ文明の研究を通して考える比較文明学の方法-切断の方法論から接合の方法論へ」、比較文明学会30周年記念出版編集委員会編『文明の未来 いま、あらためて比較文明学の視点から』163-181頁、東海大学出版部、2014年 05月。
- ゲイリー・アートン著「数学と権威：旧世界と新世界における会計学に関する事例研究」、斎藤憲・三浦伸夫・三宅克哉監訳『Oxford 数学史』21-46頁、共立出版、2014年 05月。
- 「歴史を見る目ートインビー氏の著作との出会いと今ー」『21世紀とトインビー』Vol.17、41頁、トインビー・地球市民の会、2014年6月。

【その他の活動】

- 第289回東海大学文学部 知のコスモス・展示会「はたらく庶民ー古代エジプトとアステカ」、企画・学術監修（山花京子と共同）、2014年 7月～8月。
- 東海大学第60回建学祭学科企画「中米実地研修紀」学術監修、2014年11月。
- 地球システム・倫理学会第10回学術大会「いのち～生成と循環」、大会実行委員長、個人研究発表第2部会座長、シンポジウム・コーディネータ、2014年11月。



東海大学文明研究所所報 2014

発行人 沓澤宣賢

発行日 2015年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel:0463-58-1211 ext.4900~4902 fax:0463-50-2050